

新連載

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ①

春の訪れとともに

一里一尺、あまり聞き慣れない言葉です。これは北信越で冬の雪の深さに使われる言葉です。一里歩めば一尺雪が深くなる。たったの四キロの違いで三〇センチも雪が深くなるということを表現しています。さすがに世界有数の豪雪地帯と言われる信越地帯でこそ、日々の生活から生

み出され
た言葉な
のでしょ
う。江戸
期に越後
の鈴木牧
之が著し
た「北越
雪譜」に
は、雪とともに暮らす越後の人々の
様子が細かく描かれ、「一里一尺」の
言葉が哀歓をもって感じとれます。
ずいぶん昔になりますが、春先に
私が滋賀の朽木方面から途中越えて
大原に向かい府県境のトンネルを越
えた時、突然冬から春にワープした
感覚になりました。入口付近は雪の
景色だったものが出口付近では、既
に雪のない景色に変わっていました。
まさに、川端康成の「雪国」の世界
があったのです。これも一里一尺と
言えるものだと思います。



ひと夜で積もった雪(大津市葛川地区)

この道はちよくちよく通ったのですが、京都や大津の街が桜で染まる頃、途中を越えて葛川や朽木の村里は梅が咲き出していました。春から早春へのワープです。草木の変化にも「一里一尺」と言えるものがあるのです。この小稿は、草木などを中心とした自然がちよっとした場所の違いでさまざまに変化していく様子を見ていくとともに、彼らがどんなに遅く、したたかに、しなやかに生きていくかを探っていきたいと思います。

私たちが意識するとしなやかかわらず、よく知っている草木の変化として花の咲く時期といったものがあります。特に桜の花の開花には敏感で、春になるとマスメディアでも桜前線として毎日のように報道されます。三月末の鹿児島に始まって、中国、近畿、更に北上をして五月半ばの北海道にいたるまで、約一ヶ月



比叡山を背景に高野川の桜並木



ウワミズザクラ

半を要します。(奄美・沖縄のカンヒザクラを除く) これは水平での変化ですが、同じ地域であれば標高が高くなればなるほど開花が遅くなり、一週、二週と遅くなり、垂直の変化

が見られます。町の中では桜と言えばソメイヨシノやオオシマザクラが公園や学校、河川の土手に多く植えられていますが、山に自生する桜は沢山の種

類があり、その種類によっても咲く時期の変化が微妙に違います。雪融けすぐにうつむき加減に咲くキンキマメザクラ。とても小さく薄紅色で実に可愛らしいです。そして開花の時期が長いヤマザクラ、その後にカスミザクラ、ちよつと皆さんの持つ桜のイメージとは違うウワミズザクラ・イヌザクラと順に花を咲かせていきます(京滋地方)

更に日当たりが善し悪しなど、それぞれの生育地の条件によっても変化します。

自然とはじつに多様で、幅広く、変化に富んだものであることでしょう。だからこそ飽きることなくつきあえ、その奥深さに魅了されるものでもあると言えます。

もうすぐ春…

二十四節気七十二候といわれるものが日本にはあります。和暦と言っ

ていいかもしれません。日本の四季の移ろいを上手く体現されており、俳句の季

語にも使われたりしています。これをもとに自然を見ていくのもたのしいです。この二十四節気で言うところの立春・雨水と呼ばれ、雪も雨に変わり気候も徐々に緩む頃、山ではヤブツバキが咲きだしています。ツバキは木偏に春と書き、まさに春を呼ぶ木です。濃い緑の葉と真っ赤な赤い花は、花の少ない時期の森では、実に美しい。

私の家の近くには桃山御陵(明治天皇陵)があり、沢山のヤブツバキが生育しています。この花が咲く頃、



ヤブツバキの花

散歩がてらこの森を歩きます。花の個性なのでしょいか、赤といつても真紅く薄紅までさまざまです。私は何と言つても真紅のヤブツバキが好きです。沢山のメジロがこの花に蜜を吸いにやつて来ます。メジロは夢中になつて嘴の周りが黄色くなつてもお構いなしです。ちよつと失敬して、ひとつとつて紙めてみると甘さを感じるには十分な量です。虫と違つて鳥に来て貰うにはこれぐらいの量がないとだめなのでしょう。メジロは次から次と飛びわたり、黄色い花粉を別の花につけていきます。ヤブツバキは鳥によつて花粉を媒介して貰う数少ない鳥媒花です。花にとつては有難い客なのですが、あの尖つた硬い嘴でつつくわけですから、やわな花びらではすぐに傷みます。そこで、かなり分厚いものになつています。受粉が済むとまだ綺麗なのにとつて花を、惜しげもなく落とし

ます。どうしてこんなに早く落とすのでしょうか？と思つて枝を眺めると、まだ柔らかな青い実が付いています。そうなんです。落とさないでいたら、蜜を求めてやつてくる鳥が若い実をつついて傷をつけてしまいます。そこで用のなくなった雄しべと花びらをまとめて落としていくのです。次代を確実に残すためのすごい知恵と技だったのです。よくよく見ないと本当の姿は見えてきません。

桃山御陵には沢山のツバキも植栽されたようです。そのため自生のヤブツバキと交雑して、いろいろなタイプのヤブツバキがあると言う話を聞きました。そればかりか、多くの山野でもそういったことが起こつているともいわれています。暖かくなつた太陽の光のもと多様なヤブツバキを愛でに照葉樹の森を歩いてみませんか。

林床に咲く小さな花たち

雨水の頃ともなると、林床に一二センチ前後の小さな花が咲きます。キンボウゲ科のバイカオウレンです。名前の通り梅の花に似ています。しかし、花弁に見えるものは萼で、花弁は蕊の周りに黄色く小さいシヤモジのような形で付いています。多くのキンボウゲ科の花は同じように萼が花弁のようになっています。地面近くには五つの小葉を持つ常緑の葉がついています。この花は早春に咲くスプリング・エフェメラ

ルと違い、花が終つても葉は消えてくならないの



バイカオウレン

で、葉の形さえ知っていれば年中有無を確認が出来ます。また、この花の見どころは花だけではなく、花が終わって出来る実の形が面白く特徴的です。昨今の言い方ではインスタ映えがします。舟型の果実が茎を軸に車輪状に付きます。きつと一度見たら忘れられないと思います。しかし、この実を見てすぐにバイカオウレンと言っただけじゃありませんよ。オウレンの仲間と同じような実をつけるからです。この花の変化したところをもう一つ、近畿地方以西では低山



セリバオウレン雄花・両性花

地に生育し早春に開花します。中部地方以北では亜高山帯に生育し、初夏に開花します。他にも同じような生育をする植物も見られますが何故なのかはわかりません。

比叡山延暦寺の横川あたりには、沢山のバイカオウレンが白の絨毯のように形大地を飾ります。実に見事です。一度その可愛さを愛でて下さい。オウレンの仲間は多くバイカオウレンに似たものでは、京都で自生は見られませんがミツバノバイカオウレン、ミツバオウレンなどが亜高山や深山で見られます。

漢字で黄蓮と書けば、皆さんはきつと「あつ」と思われるのではないのでしょうか。そうです。漢方薬の一つとして昔からよく使われているものがセリバオウレンです。他にもキクバオ

ウレン、コセリバオウレンとがあります。

葉っぱの違いだけで、ぱっと見はあまりよくわかりません。たくさん花の名前で混乱しそうかもしれませんが、ざっくりとオウレンの仲間ぐらいで読み流して下さい。これらはバイカオウレンより小さい花を茎に三個つけ、繊細な美を見せてくれます。やっと冬が終わったときぐらいいから咲いてくれる数少ない花なので、私は待ちわびたように、いつも近くの場所に仲間とともに見にでかけます。しかし昨今の温暖化現象で開花時期が定まりにくく、空振りをすることもあります。

早春の伊吹野に 春の妖精を訪ねる

伊吹の麓、姉川沿いに大久保、板並の集落があります。八年前、滋賀県の友人に連れられて来たとき、



伊吹野のセツブンソウ



雪の中のセツブンソウ

段々畑の間に、梅の畑の合間に、神社の境内に、里のそこかしこに普通に咲くセツブンソウを見て感動したものでした。この花の美しさに魅了されると同時に、まるで京都の街の

セイヨウタンポポやシロツメクサのように、希少種と言われるものが咲いていることが驚きと新鮮でした。セツブンソウは名前の通り節分の頃に咲くと

いうように言われています。しかし、地域によつてはもっと遅かったり早かったりします。雪が積もるところでは雪融けすぐといった方がいいかもしれません。伊吹野も雪深いところなので、開花の日は雪の多寡や気温の上昇に大いに左右されます。咲いたと聞いて行くと、前の晩からの雪でしぼんでいたり、埋もれていたり。仕方がないですね、これも自然です。本当にこれはという自然に出会えるのは一期一会といえます。ここでセツブンソウの花をご紹介しますおきましよう。高さは十センチにも満たない小さな花なので、遠くからは気が



アズマイチゲ

つきません。キンポウゲ科の花の特徴で白く花びらのように見えるものは萼です。その中に先の黄色いものが見えますが、これが花びらです。更にその中には紫色をした雄しべがあります。更に中心部には雌しべがないという形をしています。何とも言えない色の配色が多くの人を虜にします。またこの花はどこにでも咲くわけではなく塩基性岩質を好み、鈴鹿や伊吹の石灰岩に富んだ地域に生育します。

伊吹野

には、早春に花を咲かせ、実をつけると、地上からは消え去るという儚さから春



キバナノアマナ



伊吹山の春 伊吹山を望む

の妖精、英語ではスプリングエフェメラルと呼ばれる植物が同じ時期に沢山花開きます。アズマイチゲ、キクザキイチゲ、ニリンソウ、フクジュ

ソウ、キバナノアマナ、スハマソウ等々。実に見事な花畑を形成しています。

十年前からこのセツブンソウを保全する方法として、多くの人に参加するということから「せつぶんそう祭り」が地域の人のよって行われ、地域興しの一つになっていました。この地域の方はセツブンソウが残っていることを地域の誇りとして、見学に来る私達にやさしく親切に接していただいていた。しかし、昨年は「せつぶんそう祭り」がなく、段々畑や畑の所も荒れた感じで、何よりもセツブンソウの数が激減していました。地域のひとと話が出来て、事情を聞くと。セツブンソウの群生地は私有地で、今までのように草刈りとかをされなくなつた

とか言うことの結果だと言うことでしたが、詳細はわかりません。いずれにしろ自然を保全していくことの難しさの一端を垣間見ました。ただ、ふたたび美しいセツブンソウの群生が見られることを祈る思いです。

早春の花が咲くと、次から次に花が咲き、冬枯れの木立に新芽がふき出します。まるで、林床の花が育つのをやさしく待っていたかのように、コナラやブナの落葉樹たちは若葉を広げ、草花に少し遅れた春を謳歌します。私達も明るい陽ざしのもと野山に出かけてみましょうか。

*今回ご紹介した草木は京都府立植物園などでも見られますが、是非自然のものを見ていただき、生育の場所などとともに観察していただけると、より自然環境への理解が深められると思います。なお、希少種等についてのご紹介は保全の関係からビンポイントには避けたものにしていきますのでよろしく願います。